

職員リレーエッセイ

30年くらい前のはなし

ニコニコホーム 管理者 松浦信太郎

ケイタ君とは、幼稚園の時によく遊んだ記憶があります。ケイタ君は頭が良くて、幼稚園の漢字当てゲームのときに「憂鬱」とかの漢字も読めていた記憶があります。ただの難しい漢字で「憂鬱」では無かったかも知れません。ケイタ君は頭が良いので、クリスマスプレゼントはウルトラマンとか仮面ライダーとかでは無くて、お化け屋敷ゲームとか日本特急旅行ゲームとかのボードゲームでした。幼稚園の仲間たちはよくわかりません。なぜかローラースケートも持っていました。でも、ケイタ君は運動が苦手なので、飾ってあるだけでした。ただ当時の幼稚園児でローラースケートです。靴に車が付いていることに興味を持ったのでしょうか？そのあと僕たちが小学校に上がった頃、ローラースケートが流行りましたが、危険だということで禁止になった為、おそらくケイタ君のローラースケートは道路を走ることは無かったかも知れません。小学校に上がるにつれ、当時の僕たちの遊びの代表格といえば野球でした。公園は子供であふれ、陣地の取り合いで、時には喧嘩になり場所を求めて駐車場でも野球を始めてしまうので、大人たちはたまったものでなかったでしょう。高めの塀があればホームラン競争が始まり、塀で挟まれた通路があればブルペンとなります。そんな状況の中でケイタ君はいつも一緒でした。ケイタ君の役割は審判、時々プレーヤーです。とても高揚して主審をします。主にストライクとボールの判定が明確で、ストライクゾーンの定義を僕はケイタ君から学びました。僕たちの小学校には毎夏、地区対抗のソフトボール大会がありました。練習期間も設けられていて、クラブチームを休んで参加する友達もいるくらいでみんな本気です。ケイタ君と僕の家は近いから一緒のチームです。ケイタ君はプレーすることも好きでした。みんな期待をしていないので、活躍するとかなり讃えられていました。ここからは僕が6年生の時の話し。最後の夏を迎えました。僕たちは結構勝ち進みました。決勝の前くらいで、監督のおっちゃんは、僕に采配を託し用事でグラウンドを外しました。高校生くらいなら、のびのびソフトボールが始まるかもしれませんが、小学生の僕たちは不安だらけだったと思います。たぶん僕がメンバーも決めたのだと思います。あの夏ケイタ君がベンチに座っている光景が、いまでもはっきり浮かんできます。僕は勝たなかったで、ケイタ君をメンバーから外したのだと思います。戦況が怪しくなってきたとき、ミスをしそうな同級生を下げて、ちょっと上手な下級生に交代させたことも、はっきりと覚えております。そして最後の最後にピンチヒッターを出す場面があつて、誰を選ぶか迷っている時に、ケイタ君から僕への縋るような視線を今でもはっきり覚えております。そして他の下級生を選んだことも覚えております。選んだ下級生が三振をして試合終了になりました。その後のケイタ君の記憶はありません。僕はふてくされてみんなを置いて帰宅して、父親に怒られて、PTA のやさしいおばちゃんが迎えに来てくれて、閉会式に戻ったことだけしか覚えておりません。

その次の日から、幼稚園来遊んでいたケイタ君とは口をきいていません。なんでそうなったのかわかりません。ほろ苦いのか、貴重なのか、良い思い出なのか、悪い思い出なのかもよくわかりません。ただ鮮明でとても温度があり、今でも彷徨っている記憶なのです。その後友達の友達からケイタ君は日本でも超有名なトップの大学に進学したことを聞きました。ただそれだけですが、なぜかとても救われた気持ちになったことを覚えております。もし今の自分があ頃の僕の隣にいたら、どんな言葉をかけることが出来るだろうか？きっと気の利いた言葉は一つもかけられないだろうなと思います。そして歳をとるにつれてケイタ君は僕の記憶から姿を消していくでしょう。

「つぎはニコニコホームの平井信夫さんにつなぎます。」